平成21年7月2日

各　位

積水ハウス株式会社
社長：阿部俊則
本社：大阪市北区大淀中1-1-88

＊＊

住まいづくりや暮らしに役立つ情報をまとめたレポート

「view point」vol.02　発行

“子育ち”設計レポート　～子どもの学びを考えた居どころ提案～

＊＊

このたび、積水ハウス株式会社は総合住宅研究所内にある住生活研究所より、住まいに関する多角度からの調査・研究成果をもとに、住まいづくりや暮らしに役立つ情報をまとめたレポート「view point」の第二号を発信いたします。

今号では、“子どもの学びを考えた居どころ提案”をテーマに、京都女子大学との共同研究成果や、当社において2007年から全国展開している子どもの生きる力を育む住まいづくり提案（積水ハウスの“キッズでざいん”）で得られたノウハウをもとに、子どもと家族の豊かな暮らしをかなえる設計提案を紹介しています。

view point　vol.02
「“子育ち”設計レポート」～子どもの学びを考えた居どころ提案～
- ○Chapter1　母親に聞く、住まいの中の子どもの居どころ
- ○Chapter2　欲しいのは勉強部屋というより、学びの場
- ○Chapter3　子どもの学ぶ場のつくりかた
- ○子どもと家族の豊かな暮らしをかなえる設計提案

今後も積水ハウスでは、総合住宅研究所においてこれまで実施してきた多分野にわたる調査・研究によって得られた蓄積データをもとに、生活者の話題となり、住まいづくりや暮らしに役立つ、わかりやすい情報をレポートや冊子にまとめ、定期的に発信してまいります。

＜総合住宅研究所＞
関西学研都市である京都府木津川市に位置する積水ハウスの研究所。住宅の建築技術を担う「技術研究所」、人々の住まい方・暮らしについて提案する「住生活研究所」、体験型施設である「納得工房」という３つの部門より構成されている。中でも、「住生活研究所」では、人と暮らしの視点から住まいのあり方について調査・研究に取り組み、快眠研究や子ども住環境研究、ユニバーサルデザインやシニア居住研究から、防犯防災対策、家庭菜園など、住まい手にとって有意義な情報の発信や住まいづくりの支援を行っている。

＜本件のお問合せ先＞
積水ハウス株式会社　広報部
（大　阪）06-6440-3021　（東　京）03-5575-1740
e-mail：info-ir@qz.sekisuihouse.co.jp

SEKISUI HOUSE

view point

vol. 02
2009.07.02

積水ハウス株式会社 住生活研究所では、
人と暮らしの視点から住まいのあり方について
調査・研究に取り組んでいます。
多角度からの調査・研究によって得られた成果をもとに、
生活者の話題となり、住まいづくりや暮らしに役立つ、
わかりやすい情報をレポートとして発信いたします。

「“子育ち”設計レポート」～子どもの学びを考えた居どころ提案～

Chapter 1
母親に聞く、住まいの中の子どもの居どころ ･･･p.2

Chapter 2
欲しいのは勉強部屋というより、学びの場 ･･･p.3

Chapter 3
子どもの学ぶ場のつくりかた ･･･p.4

子どもと家族の豊かな暮らしをかなえる設計提案 ･･･p.5

子どもの生きる力を育む“子育ち”の視点で子どもの居どころを考える

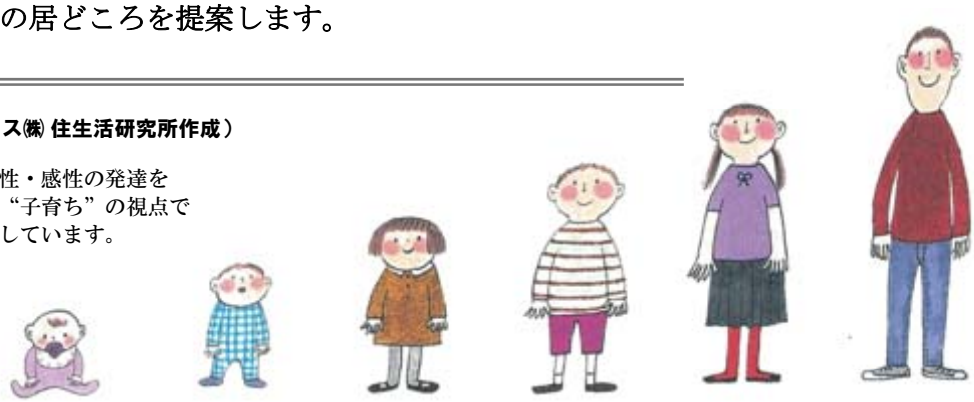
子どもは、生まれたときから自分の居どころをつくりながら育っていきます。例えば、生まれた時はお母さんの腕の中が居どころです。そして家族と触れ合える場へと拡がり、自分に与えられたものがある場所、食事の場所、遊ぶ場所、学ぶ場所と居どころは拡大していきます。公園や学校にも自分の居どころができます。そして最終的には、自分自身が家族を持ち、家族と暮らす居どころへとつながっていくわけです。

さて、今回は住まいにおける子どもの学びの場から、子どもの居どころについて考えてみました。小さいうちはリビングやダイニングで勉強する子どもが多いことは知られていますが、大きくなって個室で勉強するようになるまでの過程において、学びの場はどう変わりゆくのでしょうか。また個室の仕切り方は、きょうだい（兄弟、姉妹）の組み合わせによって違いがあるのでしょうか。

積水ハウスでは、子どもの生きる力を育む住まいづくり提案（積水ハウスの“キッズでざいん”）を2007年から全国展開しており、そこで得られたノウハウや京都女子大学との共同研究成果をもとに、“子育ち”の視点で子どもの居どころを提案します。

子どもの発達段階（積水ハウス㈱ 住生活研究所作成）

積水ハウスでは、子どもの発育や知性・感性の発達を子どもの６つの発達段階に分類し、“子育ち”の視点で住まいづくりを考える際のベースとしています。



子どもの発達段階	乳児期	幼児期前期	幼児期後期	児童期前期	児童期後期	青年期
	脳・神経系が急発達し、泣く・笑うといった言動で欲求を表現する。親への信頼感を築く。	運動・言語能力が発達。情緒の核を完成して自我が芽生え、自己主張をする。第一次反抗期。	手足の動作が安定。自主性が高まり、何でも自分でやりたがる。友達と集団遊びができる。	手先の巧緻性が増し、体力がつく。学習などに動勉に取り組んだり、生き物の飼育ができる。	男女差やプライバシーを意識。理論的知力、文化的な感性が備わる。友達の存在が大きくなる。	大人を意識して、自己を模索する。身の回りの管理や社会的対応を身につける。第二次反抗期。
おおよその学齢			幼稚園	小学低学年	小学中学年 小学高学年	中学生 高校生

Chapter 1

母親に聞く、住まいの中の子どもの居どころ

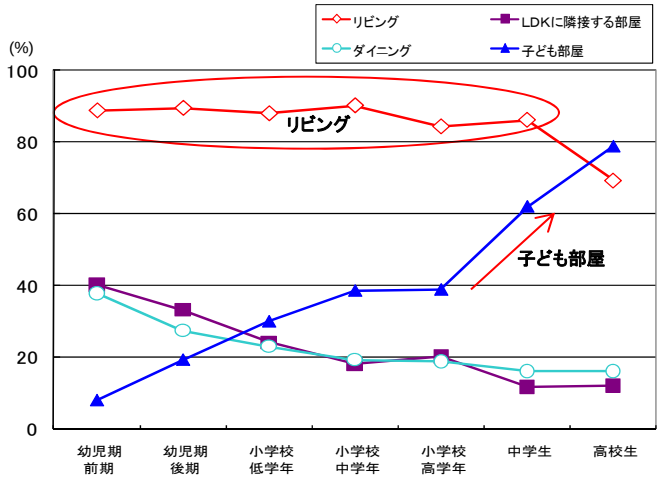
“子どもの居どころ”は“家族の居どころ”の近くが心地いい

学齢が大きくなるにつれて家の中の居どころが増える

子育て中の母親を対象にアンケートを行ったところ、家の中で子どもがよくいる場所は、「リビング」が圧倒的に多く、幼児期前期から中学生までの子どものほとんどは「リビング」によくいることがわかった。中学生になると「子ども部屋」によくいる子どもが一気に増加するが、中学生までは意外にも「リビング」が不動の1位を占めている。高校生になってはじめて「子ども部屋」によくいる子どもの割合がもっとも高くなる。＜グラフ1＞

子どもに聞きました！(※1)
「子ども部屋は遊んだり寝たりするための場所で、あまり長く居ないスペース。同室の兄とケンカすると母親の部屋へ行く。」(小4男子)
「いつもひとりになりたい訳じゃないし、家族みんなで同じ空間にいるのも快適。リビングと自室の両方が自分の空間。」(中3女子)
「自室は2階だが、ジュースやお菓子を1階までとりに行くのが面倒なので、リビングでゲームをしたり宿題をこなす。その日の気分でなんとなく自室とリビングを使い分けている。」(中1男子)

＜グラフ1＞ 家の中で子どもがよくいる場所

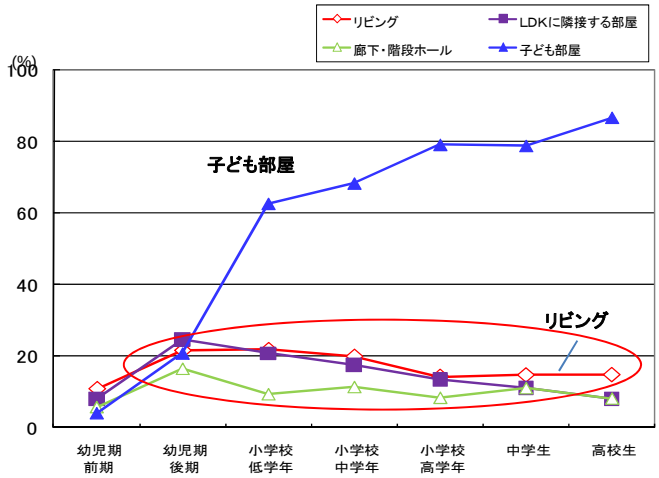


京都女子大学／積水ハウス 住まいにおける子どもの居どころ調査 ※2

子どものランドセルはリビングにも置かれている

子どもの制服やかばん・ランドセルなどは、小学校低学年になると子ども部屋に置く子どもが増えるが、依然として4割前後の子どもはリビングや廊下、LDKに隣接する部屋に置いている。＜グラフ2＞
家族の居どころにランドセルや制服が雑然と置かれている状況を改善するには、リビングやLDKに隣接する部屋にも家族の物を収納する場を設ける必要がありそうだ。「片付けなさい！」と叱ってばかりでなく、発想を変えれば自ら片付けるというしつけにもなる。

＜グラフ2＞ 学校の制服やかばんの置き場



京都女子大学／積水ハウス 住まいにおける子どもの居どころ調査 ※2

**子どもは成長とともに独立心が芽生え
個室を求める傾向にあるが、
周辺環境に応じて家族が集まる場所にも
自分の心地いい場所を探し求めている。**

＜調査概要＞
※1 「子ども部屋実態調査(2004)」 対象：将来家を建てたい20～40代の母親N=12、子どもN=12 時期：2004年5月 方法：訪問聞き取り調査
※2 「住まいにおける子どもの居どころ調査(2007)」 対象：2歳から高校生までの子どもを持つ母親N=591（子ども1066人） 時期：2006年11月 方法：郵送アンケート調査
※3 「子ども部屋に対する要求の性差調査(2009)」 対象：2人きょうだいを持つ子育てを終えた母親N=82、時期：2008年7月 方法：面接聞き取り調査
注 ： ※2および※3 は京都女子大学生活造形学科 片山勢津子研究室との共同研究

Chapter 2

欲しいのは勉強部屋というより、学びの場

子どもはさまざまな状況に応じて勉強する場所を使い分けている

勉強する場所がいろいろある子どもたち

勉強する場所を学齢別に見てみると、小学校低学年では「リビング」で勉強する子どもが多いが、小学校高学年になると、「子ども部屋」で勉強する子どものほうが多くなる。これはリビングで勉強しなくなるのではなく、複数の勉強の場を使い分けるようになるということである。意外にも高校生の4人に1人が「リビング」を勉強する場所として使っている。<グラフ3>

また、居住形態別に見ると、分譲マンションに住んでいる子どもに比べて、一戸建て住宅に住んでいる子どもの方が「リビング」で勉強する割合が高い。逆に、分譲マンションに住む子どもが「子ども部屋」で勉強する割合が高いのは小学生の間のみで、中学生になれば住居形態による差は見られなくなる。<グラフ4>

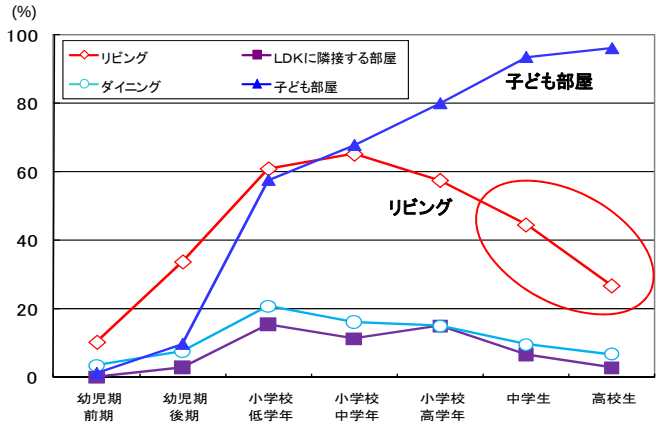
きょうだいでも中学生になれば個室が望まれる

2人きょうだいを持ち既に子育てを終えた母親に、望ましい子ども部屋の間取りについて、A:部屋を一緒に使うタイプ、B:1人ずつ個室を使うタイプ、を比較してもらった。長子が小学校入学時は部屋を一緒に使うタイプが好まれ、長子が中学校入学時は部屋を分けて使うタイプが好まれた。これは成長とともに子どもの自我が芽生えることや、子ども部屋で勉強するようになるからだと考えられる。ただし、女ー女きょうだいを持つ母親の4割からは、長子が中学校入学時でも部屋を一緒に使うタイプが支持された。これは同時期における男ー男きょうだいの結果と比較すると、実に倍の割合であることがわかる。<グラフ5>

子どもに聞きました！(※1)
「今まで宿題をリビングでしていたが、学習塾に通いだしてから、子ども部屋で勉強するようになった。リビングは妹が遊んでいてうるさく、集中できない。」(小5男子)
「姉の部屋の隣で間仕切りは透明がいい。扉つきの小さな窓があって、さびしくなったときは姉と話をしたり手をつないだりしたい。」(5才女子)

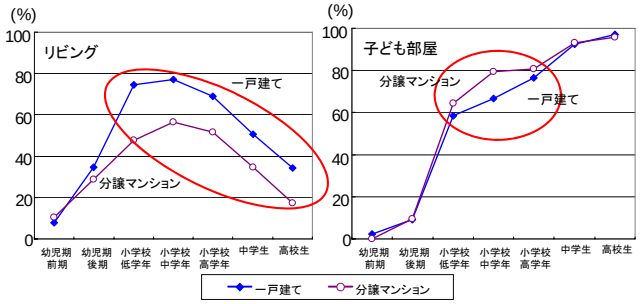
子どもは、勉強部屋を与えたらそこでしか勉強しなくなるというわけではなく、大きく成長してもさまざまな状況に応じて勉強する場所(居どころ)を使い分けている。

<グラフ3> 家の中で子どもが勉強する場所



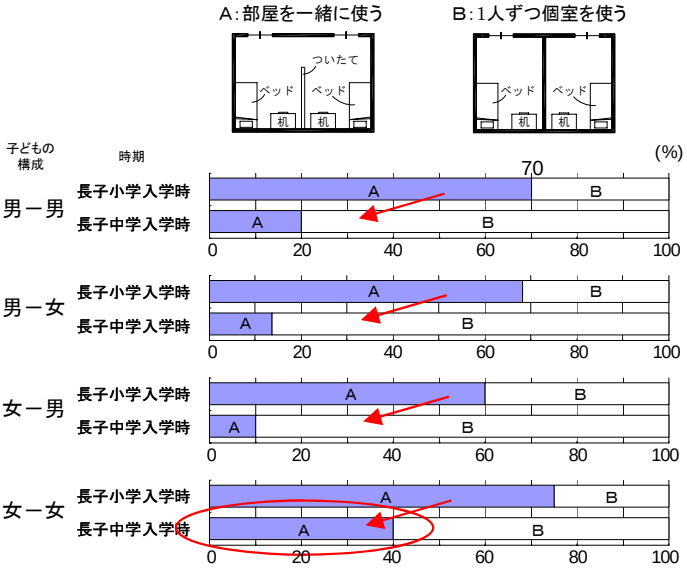
京都女子大学／積水ハウス 住まいにおける子どもの居どころ調査 ※2

<グラフ4> 住居形態別リビング・子ども部屋で勉強する子どもの割合



京都女子大学／積水ハウス 住まいにおける子どもの居どころ調査 ※2

<グラフ5> 子ども部屋として望ましい間取りは？



京都女子大学／積水ハウス 子ども部屋に対する要求の性差調査 ※3

Chapter 3

子どもの学ぶ場のつくりかた

ダイニングやリビングのテーブルは子どもの学ぶ場にふさわしいか

ダイニングで勉強する子どもを親が対面キッチンから見守るという生活シーンがよく設計に見られる。ダイニングテーブルで勉強すると「家族と会話しながら楽しく勉強できる」というメリットもあるが、「食事の支度が始まると調理の音やにおいが気になったり、食事の準備の邪魔になって勉強できない」「消しゴムのカスが散乱し不衛生」というデメリットもある。また、ダイニングテーブルは通常大人の体型に合わせて設計されており、一般的に子どもが勉強するにはテーブルの位置が高すぎる。照明も食事用の500ルクス程度の明るさが多く、勉強に必要な照度（750～1000ルクス）からすると目にも良くないことが多い。

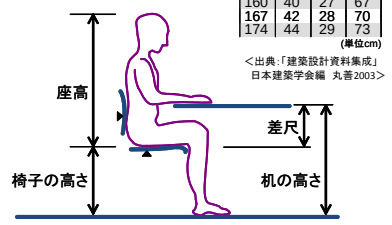
興味深いことに、当社が行ったアンケート調査でもダイニングよりリビングで勉強する割合が高いという結果が得られた。しかし、リビングも実は床座テーブルやソファを使用するため、勉強する姿勢には到底ならない。つまり、ダイニングやリビングのテーブルは、子どもの学ぶ場としてはふさわしくないのである。

体の大きさに適した椅子・机の寸法

身長	椅子の高さ	差尺	机の高さ
104	24	19	43
111	26	20	46
118	28	21	49
125	**30**	**22**	**52**
132	32	23	55
139	34	24	58
146	36	25	61
153	38	26	64
160	40	27	67
167	**42**	**28**	**70**
174	44	29	73

(単位cm)

＜出典:「建築設計資料集成」日本建築学会編　丸善2003＞



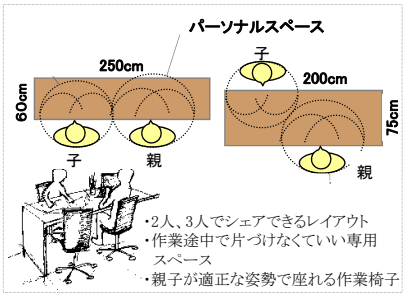
大人用の差尺（机の高さと座面の高さの差）が28cmに対し、平均身長125cmの小学4年生では22cmと6cmも差がある。

家族の居どころの中に子どもの学びの場をつくる

（積水ハウスが提案する「ファミリーステーション」）

ダイニングテーブルの近くでも、リビングルームの一角でも、子どもと一緒に座れる机と椅子のあるコーナーを用意しよう。そこが家族の居どころの中にある子どもの学ぶ場となる。子どもの宿題道具やランドセルの置場も作っておくとさらに良い。家族とのコミュニケーションを豊かにしながら、ダイニングやリビングを散かさずに暮らせる。お父さんやお母さんのパソコンや本を置けば、そこは家族みんなが学ぶ場にもなる。

積水ハウスの「ファミリーステーション」



リビングやダイニングにいる家族と触れ合える場所に、2人で作業できる机を。並んで座る形と、対面する形がある。

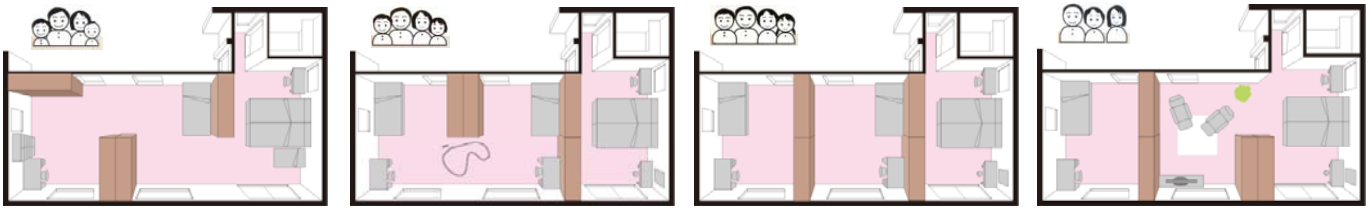
子どもの発達段階に応じて子ども部屋へのニーズが変わる

子どもは日々、学習能力や感性、社会性が発達している。その発達段階に応じて、やがて学ぶ場であり自己を見つめる場でもある個室（部屋を別々に使う）を求める時期がやってくる。

きょうだいが2人の場合、通常は長子から個室をリクエストするため、末子の部屋も自ずと個室になってしまう。しかし、住まいにおける子どもの居どころを考えるにあたり、子どもが自分の意思で家族と一緒の居どころと自分だけの居どころを使い分けることは、子どもが自立した大人になるための大切な過程のひとつといえる。

その時のために、子どもの成長に合わせて将来個室となる空間の仕切りに、可変性を持たせておくことが大切。パネルを並べて壁や仕切りを作ったり、収納家具の配置の仕方で部屋の構成を変更できると良い。住まいは、きょうだいが一緒にいる時期と1人になる時期のコーディネートを受け持っているのである。

○子どもの発達段階によって間取りが変えられる子ども空間　（積水ハウスが提案する可動間仕切り収納「ヴァリエス」）

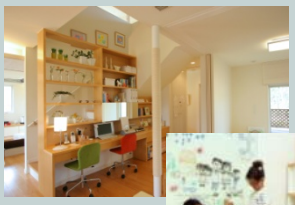


両親＋乳児期＋幼児期後期 ▶ 両親＋児童期前期＋児童期後期 ▶ 両親＋青年期＋児童期後期 ▶ 両親＋成人期（1人は独立）

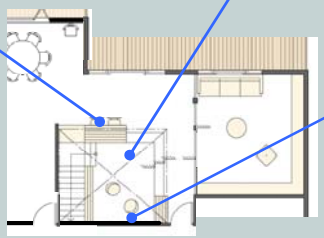
子どもと家族の豊かな暮らしをかなえる設計提案

積水ハウスでは、親の目線から見た“子育て”の考え方に、子ども自身の成長を視点とした“子育ち”という考え方を加えた住まいづくりを2007年から全国展開し、今後も引き続きこのような設計提案を強化していきます。
（子どもの生きる力を育む住まいづくり提案「積水ハウスの“キッズでざいん”」の取り組み・考え方が評価され、第1回キッズデザイン賞[2007年]を受賞しています）

◆家族の居どころの中に学ぶ場をつくる



親子の勉強の場
「ファミリーステーション」
勉強や読書、工作など親子で一緒に利用できるデスクスペース。コミュニケーションが自然にとれる家族のための居どころです。



一段高い空間による領域感
「ステージリビング」
適度な段差が空間のなかに領域感をつくり出し、子どもたちが自由に過ごせる居どころがうまれます。

「ドラフトウォール／多機能ガラス黒板」
絵や図を描いて考えを伝えることで、説明力や思考力が身に付きます。

◆発達段階にあわせた子ども部屋を

可動間仕切り収納「ヴァリエス」
クローゼットや本棚などの可動ユニットで構成され、歳月と共に変化するライフスタイルに柔軟に対応した空間構成を作る可動間仕切り家具システム。住まい手自身で移動させて固定ができます。

空間可変システム
「マドリング・ライフ」
設置位置を自由に変えられる可変間仕切り壁によって子ども室や主寝室はもちろん、リビングやダイニングなど幅広い空間での可変性を実現できます。

◆集合住宅における子育ち空間の提案実例
「グランドメゾン伊丹池尻リテラシティ」

（第2回キッズデザイン賞[2008年]建築・空間デザイン部門賞を受賞）

幼児期や児童期前期の子どもに向けた、オリジナル天然木遊具や、囲碁・将棋の仕掛けのある壁、描きながら会話できるドラフトウォールを配した“プレイルーム”を共用部に設けた分譲マンション。
児童期後期や青年期の子どもに向けて、図書コーナーと、個別ブースにLAN回線を装備した机のある、タタミ床の“スタディルーム”を設置。一住戸では得られない、集合住宅ゆえに可能な多世代交流型の学びとコミュニケーションの場を実現しています。

☆物件概要：所在地：兵庫県伊丹市池尻/総戸数：368戸
/階数：地上15階建/入居開始：2009年6月

個別スタディブース
可変パーティションで仕切って集中力をアップ。

積水ハウスの“キッズでざいん”仕様ラインアップ

①家族のつながり	家族の自然な集いとくつろぎが生まれる「ピットリビング」
	家族みんなで泣いたり笑ったりの「リビングシアター」
	家族とつかず離れずの居心地の良さを楽しむ、リビングより一段高い小空間「ステージリビング」
	和室を兼ね備えたタタミの空間「茶の間リビング」
	子どもの健やかな成長を実感する「背くらべ柱」
	第2のダイニング・リビング「リビングガーデン」
	帰宅時や外出時にも自然と顔を合わせる「リビングアクセス階段」
	家族の気配が伝わる「リビング吹き抜け」
	一緒に作れば、もっと楽しくて美味しい「コミュニケーションキッチン」
	歯磨きを教えたり、忙しい朝も並んで使える「２ボウル洗面」
	その日の出来事を聞ける、ゆったり会話タイム「コミュニケーションバス」
②知をはぐくむ	きょうだいや友達と伸び伸びと遊べる、「子どもリビング」
	成長に応じてレイアウトが変えられる「可動間仕切り収納／ヴァリエス」
	成長に合わせた部屋づくりができる「フレキシブル子ども部屋」
	子どもの夢が大きく膨らむ「隠れ家空間」
	知る歓びや楽しさを育む「ファミリーライブラリー」
	勉強やお絵かきなどに専念できる「ファミリーステーション」
	思ったことをのびのびを描き、家族との対話を深める「ドラフトウォール」
	家族での共同作業や収穫の喜び、おいしさを味わう「菜園ガーデン」
	自然とのふれあいを身近にする親自然ガーデン「芝生」
	自然とのふれあいを身近にする親自然ガーデン「５本の樹」
	自然の恵みの上手な活かし方が学べる「雨水タンク」
	自然の恵みの上手な活かし方が学べる「雨水取出口パッコン」
	電力消費が楽しくチェックできる「省エネナビ」
	創エネ・省エネをわが家で体験学習する「太陽光発電システム」
	手触り・色合いが五感に心地よく働きかける「自然素材」
	子どもと一緒に部屋づくりを考える「自分でインテリア」
	手が届きやすく操作しやすい「ファミリースイッチ」
	小さな子どもにも使いやすい「ステップ付き洗面化粧台」
	子どもにもスムーズに開閉できる「引き戸用握りバー（ＤＸ）」
③家事を楽しむ	泥んこ遊びの汚れを室内に持ち込まない「屋外洗い場」
	子どもを見守りながら家事もしやすい「ファミリーステーション」
	スムーズな洗濯作業を実現する「衣家事コーナー」
	脱衣室で必要な衣類はあらかじめ脱衣室に「脱衣室着替え収納」
	子どもに目が届きやすく、お手伝いも習慣になりやすい「対面キッチン」
	子どもと一緒の時間を過ごすためにも、一気に片付く「大容量食器洗い乾燥機」
	子どもが安全に使える「ＩＨクッキングヒーター」
	子どもでも自分で分けて捨てられる「分別ゴミ収納」
	食材をまとめて収納できる食品庫「パントリー」
	雨の日でも荷物の積み降ろしがしやすい「ビルトインガレージ」
	ベビーカーや三輪車の通行もスムーズな「スロープ」
	子どもや荷物を抱えたままでも操作しやすい「キーレスエントリー」
	落書きや汚れを落としやすい「フィルム貼り壁紙」
	汚れた部分をはずして洗える「ファブリックフロア」「タイルカーペット」
	お片づけの習慣につながる「リビング収納」
	遊具や庭・レジャー用品の収納に便利な「外部収納」
	散らかりがちな玄関をすっきり保てる「シューズクローク」
④健やかに育てる	安定した歩行リズムを生み出す「階段途中に踊り場のある階段」「吹き寄せ4段回り階段」
	滑りとつまずきに配慮した「ＳＵＤＫ階段」
	滑りとつまずきに配慮した、階段の滑り止め「ノンスリップ」
	まぶしすぎない明るさで安全性を高める「足元灯」
	様々な面から細かく安全に配慮した「手すり」
	キッチンでのイタズラを防ぐ「チャイルドロック付きコンロ」
	包丁を安心して収納しておける「チャイルドロック付き包丁さし」
	つまずき事故を防ぐ「段差のない浴室出入口」
	滑りにくく乾きやすい「エンボス加工の浴室床」
	万一の溺れ事故を防ぐ「チャイルドロック付き浴室扉」
	子どもにも大人にも安全な「合わせガラス入り屋内建具」
	子どもにも大人にも安全な「引き戸」
	床への出っ張りを抑えた「床面付ドアストッパー」
	大きなドアもゆっくりと閉まる「ドアクローザー」
	子どもの指先も挟まれにくい「指挟み防止配慮収納折れ戸」
	ぶつかった時にも大怪我になりにくい「コーナー部分のＲ処理」
	転んだときの衝撃を緩和する「カーペット」
	出入り時のつまずき事故を防ぐ「フルフラットサッシ」
	離れた場所から子どもの様子を確認できる「カメラモニターシステム」
	ベビーゲートをしっかり設置できる「ベビーゲート用壁下地補強」
	最高水準の化学物質対策を施した「Ｆ☆☆☆☆建材」
	クリーンな室内空気を保つ「換気システム」
	住まい全体で花粉の侵入を防ぐ「花粉配慮仕様／花粉除去エアシャワー」
	飲み水から健やかな暮らしを支える「ビルトイン浄水器」

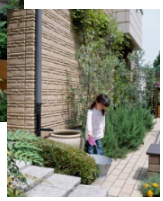
ピットリビング

背比べ柱

ドラフトウォール/
マグネットウォール

ファミリーライブラリー

雨水タンク



雨水取出口パッコン

暮らしと住まいの研究を通じて、豊かな暮らしと住まいをプロデュースする

積水ハウス　総合住宅研究所／住生活研究所

一人ひとりの豊かな暮らしと住まいの創出を目標に、居住環境と住まい手との関係を、人間生活工学や、心理、生理的な側面から研究。また、家族のあり方や生活スタイルなどから時代ニーズを捉えた調査研究を行い、住まいづくりや街づくりに活かしています。

＜おもな研究テーマ＞

- 暮らしの安全安心の研究：ユニバーサルデザイン、防犯　etc
- 人にやさしい環境の研究：睡眠空間、健康配慮設計　etc
- 新しい暮らしと生活価値の研究：ペット共生、キッズデザイン、家庭菜園　etc

総合住宅研究所（京都府木津川市）

本レポートに関するお問合せ先

積水ハウス株式会社　広報部

〒531-0076　大阪市北区大淀中1-1-88　梅田スカイビル　タワーイースト

Tel：06-6440-3021　　Email：info-ir@qz.sekisuihouse.co.jp

view point vol.02　　2009年7月2日　　積水ハウス株式会社　発行